

II 資料紹介 II

戦時下の今井福治郎——四冊の著作

付、略歴・主要著作目録

高橋美織

『萬葉集』の防人歌と、「支那事变防人の歌」で構成された『萬葉集防人歌の鑑賞』（有精堂 一九四二・四）の著者である佐佐木信綱は、同書「序」において、共著の今井福治郎についてこのように触れている。

本書は、かくのごとき伝統の精神をその具象顕現に於いて究明することにより、愈々国民精神を作興し、明浄正直の誠を以て、大御心に応へ奉らむがために、今井福治郎君と共に企て編んだものである。

生涯にわたり、『萬葉集』研究に取り組んだ今井であるが、戦時下の活動については、この『萬葉集防人歌の鑑賞』と、同じく佐佐木との共著である『萬葉集神事語彙解』（有精堂

一九四四・二）が挙げられるばかりで、同時期に出版された四冊の書籍について語られることはなかった。

これらの四冊は、いずれも皇国史観に基づいた作品とされたことから、戦後に読み返されることもなく、埋もれたままであった。今回は、今井福治郎という『萬葉集』研究者の、そのような戦時下の著作を検証することにより、活動の一端を明らかにしていきたい。

『学習本位 臣民の道全解』今泉忠義共著 有精堂 一九四一年九月 B6版 本文二五四頁

『臣民の道』とは、皇国教育を推進するために、一九四一（昭

和一六)年三月三十一日、当時の文部省教学局が刊行した国民教化用の教材である。学校や教育団体に配布されたこの本は、終戦後、東京裁判でも取り上げられており、戦前教育の象徴の一つとなっている。

一九四一(昭和十六)年九月から翌年八月まで、「東京朝日新聞」には、久松潜一・志田延義解題、高須芳次郎註解『註解臣民の道』(朝日新聞社)、紀平正美編『臣民の道通義』(皇国青年教育協会)、井上清純著『教育勅語と臣民の道』(富山房)など一〇冊余りの『臣民の道』解説書の広告が掲載された。執筆にあたった学者、教育者、評論家、政治家らの顔ぶれも豪華であり、各出版社が『臣民の道』の解説本をしのぎを削るよう刊行していたことがわかる。

今泉と今井による『学習本位 臣民の道全解』は、これらの解説本の中では比較的早い時期である、九月に出版された。

臣民の道は要するに、「海行かば 水漬くかばね 山行かば 草むすかばね 大皇の 辺にこそ死なぬ かへりみはせじ」いふ萬葉人の魂と血をそのまま受け継いでゐる純忠の心と、孝謙天皇がみことゆりで、

古者、民を治め国を安んずるは、必ず孝を以て理む。百行の本、茲より先なるは莫し。

と、仰せられてゐる孝の心、即ち忠孝に帰一するところにある。

序文の後半に、このように『萬葉集』との共通点について触

れている箇所がある。署名は「著者」としか書かれておらず、今泉と今井のどちらが書いたのかは不明である。

同月の「東京朝日新聞」九月一九日朝刊一面に掲載された広告内の「本書の特色」には、次のような記述がある。

一、斯界の權威である国文学者と實際指導者との共著にして詳細明確に解説したること。

二、内容是要旨・感想・文段・通釈・語釈・試問の七方法を採りたるために概括的に精神的に且又組織的に体系的に学習することを得。

三、巻末の語句索引によつて学習に徹底を期すること。

四、内容豊富にして価格低廉なること。

「一」にあるように、広告には「國學院大学教授今泉忠義」「文士今井福治郎」とある。「折口信夫の五博士」と呼ばれていた今泉は、今井より一歳年上であったが、今井が國學院大学に入学した時にはすでに教授の地位を得ていた。

この時期の今井は國學院大学を卒業後、神田区の今川家政女学校で教鞭を執っていた。翌年四月に佐佐木信綱との共著『萬葉防人歌の鑑賞』の出版を予定してはいたが、研究者としての道を歩み始めたばかりのいわば「駆け出し」の時期であったといえる。この『学習本位 臣民の道全解』は、國學院大学教授という今泉に依頼があったと思われるが、今井の長女の名付け親であるなど、親しくしていたこともあり、若手研究者で教育者である今井に共著を持ちかけたとみてよいだろう。

まだ肩書きが「文学士」であつた今井にとつては、共著とはいえ、執筆に力が入つたことは間違いないだろう。難解な本文を歯切れの良い文章と平易な説明で解説した本作は、今井の力量をも示すものであるといえよう。

『娘もつ母へ』 湯川弘文社 一九四一年六月 B 6版 本文
二四二頁

『臣民の道』の三箇月前に出版された。「東京朝日新聞」一九四一年六月二五日付夕刊一面に「家庭の明朗化」と横書きで大きく書かれた広告が掲載されている。「母よ娘を知れ」「娘よ母を知れ」「大増刷」「読め 父も母も 先生も 女学生も 娘も 職業婦人も」といった紹介や、目次の一部である「母の力。叱り方。嫁。叱られた娘の気持。家出。女学生の結婚観。誘惑。女店員。夜学生」といった記述もある。

内容の多くは女学生の趣味・嗜好の調査や、学校での出来事などであるが、「序にかへて」に、近頃多い学術的な書物ではなく、「肩に鬱血しないやうに随筆風に書いてみた」とあるように、今井の身辺雑記的な文も多い。『萬葉集』の歌の引用もある。「事変と母」の章では、『支那事変歌集』（斎藤茂吉・土屋文明編 岩波書店 一九四〇・一〇）の母の歌を挙げ、「今後の女性であり、母である者は、子は自分の子であると認識することは勿論大切であるが、それと同時に、大君の大切の子であるといふ考へを、より一層深めなければならぬ」とあるが、

このような啓蒙的な文は少ない。今井の軽妙な文章の効果もあり、広告のような教育書ではなく、気楽に読める一冊に仕上がっている。

『転換期の女性』 有精堂 一九四二年六月 B 6版 本文
四一九頁

「東京朝日新聞」一九四二年八月二一日付朝刊一面は有精堂の『実務工業辞典』と同じ枠内に、「読売新聞」八月二二日付朝刊二面は、有精堂の『実務工業辞典』と『萬葉集防人歌の鑑賞』と同じ枠内の広告である。いずれも「村岡花子序」という記載の後に、「若い女性の現在心のありかたを正面から見つめ、重大時局下の心的生活に触れる記録と見通しである」という紹介がある。

前作同様、女学生を調査したものや、今井の身辺雑記的な文も見受けられる。その中に、月に二回開かれていた「萬葉集鑑賞会」について書かれた短文がある。

せめて一夜でも、二夜でも、上代人の魂に触れることは、とかく乾からびようとする魂に潤ひを与へてくれる。上代人の心とつながりを持つ自分達である。味はつてゐる間に、萬葉人の脈搏が感じられる。その一刻が尊い。

前年の国民動員計画や太平洋戦争の開戦により、女性を取り巻く社会状況も「転換期」を迎えてしまった。それを踏まえ、序文や後半の文には、戦時下の女性の任務や心構えを説く箇所

もあるが、大部分は、不自由を実感しながらも日々を生きる今井の姿が描かれている。

『母の愛行』 村岡花子共著 有精堂 一九四三年五月 B 6版
本文三一―二頁

一九四一（昭和十六）年二月の真珠湾攻撃において、特別攻撃隊として戦死した九名、すなわち「九軍神」の故郷を訪ね、家族や恩師を取材した労作である。同じ甲府出身である翻訳家の村岡花子との共著となっており、序文は村岡が書いているが、本文はその内容から、すべて今井の執筆によるものであることがわかる。

広告は「読売新聞」一九四三年五月一九日付朝刊一面、「東京朝日新聞」五月一六日付朝刊一面に掲載された。いずれも同様の体裁で、「母性観、女性観に独自の抱負を持つ著者が真珠湾攻撃に散華した九軍神の生家を親しく訪れ母の愛行の如何に偉大であるかを痛感して、世の母に、女性に訴へた刻下喫緊の良書」と紹介されている。

九軍神の故郷を訪問する旅は、一九四二年に三回に分けて行われた。

三月二三日―二九日（横山家、佐々木家、上田家、片山家、稲垣家訪問）東京―鳥取―島根―岡山―大阪―京都―松阪
四月二六日（岩佐家訪問）東京―前橋
六月一〇日―一七日（古野家、廣尾家、横山家訪問）東京

―山口―鳥栖―熊本―鹿児島―東京

これらの旅も、四月の前橋訪問が村岡ともう一名の三名であっただけで、他の二回は今井が一人で足を運んでいる。道中、『萬葉集』の歌や自作の歌、その地域の風土などが描かれているところに今井らしさを感じることができる。

すべての取材を終えた今井は、「それまで母性教育や女子教育、母親気質、娘の言動に飽き足らざるものを持っていた」が、九軍神の記事を読んで心の中で「これだ」と絶叫し、それらの教育の再出発点がここにあると断じた、と記述している。さらに、「私の受けたこの感動で、私の受けたこの魂で、明日への女性、明日への母性の教育にぶつかつて行かう」、「我が子を育て養ってゐたお母さん方のお話を全母性、全女性に伝へよう」という感想を述べている。それは、息子を戦場で失った母たちの取材を終えたばかりの、今井の偽らざる気持ちであろう。

今井は戦後、女子大学で教鞭を執り、引き続き女子教育に携わることになったが、その学生たちに、戦争時の話をするとはなかったという。戦争に対し、今井にどのような思いがあったかは知るよしもないが、晩年に出版した随筆集『武蔵野だより』（桜楓社 一九六五・五）の一文に、今井のたどり着いた境地を見ることができるとある。

幸福とは、自分に与えられた現在の範囲内で何の心配もなく、夢の実現に努力していられることではないだろうか。

いずれにしても仰々しいものではなく、ささやかな所に、
ささやかに息づいているもののように思われる。
今井が本場に「何の心配もなく」夢の実現に向かうことがで
きたのは、戦後になってからであろう。だが、その期間は短か
すぎたと言わざるを得ない。

今回挙げた今井の四作は、戦時下という時代の徒花であった
のだろうか。いや、決してそうではない。今井はその時代を研
究者として懸命に生きていたのである。その姿を記録すること
が、当時の『萬葉集』研究の足掛かりになれば幸いである。

今井福治郎略歴

一九〇一(明治三四) 七月二日、山梨県甲府市にて父今井久吉、
母政の三男として出生

一九〇九(明治四二) 甲府市立琢美尋常小学校入学

一九一一(明治四四) 三月、琢美小学校尋常科二年卒業。四月、
甲府市立春日小学校入学

一九一四(大正三) 三月、春日小学校尋常科六年卒業。四月、
甲府市立富士川尋常高等小学校入学

一九一五(大正四) 三月、富士川尋常高等小学校高等科一年
修業。四月、山梨県立師範学校附属小学

校入学

一九一七(大正六)

三月、山梨県立師範学校附属小学校高等
科三年卒業。四月、山梨県立師範学校入

学

一九二二(大正一一)

三月、山梨県立師範学校本科第一部課程
修了。甲府市立穴切小学校勤務。六月か
ら七月にかけて、第一師団歩兵第四十九
聯隊(甲府)に六週間現役服役

一九二五(大正一四)

四月、穴切小学校を休職。山梨県立師範
学校文科研究専攻科入学

一九二六(大正一五)

三月、山梨県立師範学校文科研究専攻科
卒業。穴切小学校に復職

一九二七(昭和二)

この頃から作歌をはじめ

一九二八(昭和三)

五月、甲府市立湯田小学校に転任
三月、湯田小学校を退職。四月、東京へ
転居。國學院大学文学部国文学科入学

一九三四(昭和九)

「万葉茜会」発足。歌集「潮のながれ」
出版。七月から一二月まで、「山梨日日
新聞」に「萬葉集の研究」を不定期連載
(「今井白水」名義・全八回)

一九三五(昭和一〇)

二月、東京市今川小学校代用教員就任
(一〇月まで勤務)。三月、國學院大学文
学部国文学科卒業。卒業論文「万葉集の
研究―下紐考其の他」。一〇月、東京市
神田区今川家政女学校教諭となる。この
年より鵜殿正元氏と共に佐佐木信綱氏の

『万葉辞典』編集を手伝う

一九四〇(昭和一五) 七月、武蔵野町吉祥寺に転居

一九四四(昭和一九) 三月、都立四谷高等家政女学校教頭となる

一九四五(昭和二〇) 家族の疎開先の甲府と東京を往復。四谷高等家政女学校は戦火で焼失。八月から、國學院大学教務係・神職養成部講師を兼任。一〇月、四谷高等家政女学校を依願退職。國學院大学講師に就任

退職。國學院大学講師に就任

一九四六(昭和二一) 三月、和洋女子専門学校講師に就任

一九四九(昭和二四) 六月、和洋女子大学教授に就任

一九五〇(昭和二五) 三月、「雪炎短歌会」主宰。歌誌「雪炎」創刊(以後月刊)

一九五四(昭和二九) 「房総文化研究会」主宰となる

一九五八(昭和二三) 三月、千葉県文化財専門委員に就任

一九六一(昭和三五) 三月、「萬葉集の地名と傳承」國學院大学にて文学博士授与(第77号)

一九六八(昭和四三) 一月二三日、日大病院にて胃がんのため永逝。享年六六。従五位勲四等瑞宝章を受く

『転換期の女性』 有精堂 一九四二年 六月

『萬葉抒情歌の鑑賞 愛育社文化叢書2』 愛育社 一九四七年 一月

『東国萬葉紀行』 有精堂 一九四七年 四月

『歌体論』 有精堂 一九四八年 二月

『百人一首新解』 東京大盛堂 一九五二年 二月

『徒然草全釈 語釈、鑑賞本位』 東京大盛堂 一九五三年 一月

『奥の細道全釈』 文源堂 一九五四年 五月

『万葉・古今・新古今 最新国文解釈叢書』 法文社 一九五四年 九月

『桐の花研究 再版』 互用堂 一九五五年 四月

『房総万葉地理の研究』 春秋社 一九六四年 五月

『武蔵野だより 現代の教養52』 南雲堂桜楓社 一九六五年 九月

『房総の祭』 南雲堂桜楓社 一九六五年 九月

『続・武蔵野だより 現代の教養58』 南雲堂桜楓社 一九六六年 九月

『万葉の春 現代の教養43』 桜楓社 一九六八年 三月

『万葉集の研究』 桜楓社 一九六九年 一月

『写真 房総』 角川書店 一九七〇年 四月

『今井白水歌集』 白水会 一九七一年 七月

今井福治郎主要著作目録

著書

『娘もつ母へ』 湯川弘文社

一九四一年 六月

著書（共著）

『学習本位 臣民の道』全解 今泉忠義共著 有精堂

一九四一年 九月

『萬葉集防人歌の鑑賞』 佐佐木信綱共著 有精堂

一九四二年 四月

『母の愛行』 村岡花子共著 有精堂

一九四三年 五月

『萬葉集神事語彙解』 佐佐木信綱共著 有精堂

一九四四年 二月

『現代詩歌選』 國學院大学調査部編 藝苑社

一九五〇年一月

『明解日本文学新辞典』 高崎正秀他共著 精文館

一九五三年 六月

『早春挽歌』 今井千代子共著 自刊

一九五四年 三月

『国文解釈完全問題集 実力涵養完全問題集シリーズ』 山崎喜信共著 森北出版

一九五五年 一月

『市川―市民読本―』 市川市教育委員会 編・発行

一九六六年 三月

枕詞「高麗劍」・「劔太刀」考 『國學院雑誌』 第三八卷八号

一九三二年 八月

枕詞「高麗劍」・「劔太刀」考（承前） 『國學院雑誌』 第三八卷一〇号

一九三二年一〇月

「がにぐぞう」をめぐりて 『旅と伝説』 第七年八号

一九三四年 八月

「かに」考 『國學院雑誌』 第四〇卷九号

一九三四年 九月

タナを中心として 『旅と伝説』 第七年一〇号

一九三四年一〇月

「あえぬかに」と「あえかに」と 『國學院雑誌』 第四一巻二号

一九三五年 二月

甲斐の樹木信仰 『旅と伝説』 第八年一〇号

一九三五年一〇月

遠妙寺の石 『旅と伝説』 第八年一一号

一九三五年一月

地名起原伝 『旅と伝説』 第九年八号

一九三六年 八月

地名起原伝（二） 『旅と伝説』 第九年一〇号

一九三六年一〇月

地名起原伝（三） 『旅と伝説』 第九年一二号

一九三六年十一月

甲州路（鵜殿正元との共著） 『心の花』 第四一巻二二号

一九三七年一二月

考証 『短歌研究』 第六卷第一二号

一九三七年一二月

特殊研究―鏡の山― 『短歌研究』 第七卷第四号

一九三八年 四月

「な」と「な」 『國學院雑誌』 第四五巻二号

一九三九年 二月

歌合の底流意識―天歌合の重要性 『國學院雑誌』 第四六巻一

一九四〇年 一月

号

連作新論―物語との交渉― 『短歌研究』 第九巻六号

一九四〇年 六月

- 研究 しぬぶ心 『国文学解釈と鑑賞』第七卷二号 一九四二年 二月
- うれといふ言葉 『学苑』第九卷第二号 一九四二年 二月
- 大君の命かしこみて 『國學院雜誌』第四八卷四号 一九四二年 四月
- 天徳歌合 『国学論纂』 国学談話会編 (神田書房) 一九四二年 六月
- 「出家とその弟子」の位相 『文学研究』第三号 一九五〇年 四月
- 傍觀者の位置—憶良を中心として 『日本文学論究』第七冊 一九五一年 三月
- 「みやび」の近代的展開 『國學院雜誌』第五三卷一号 一九五二年 四月
- 巫女文学論 『文学研究』第八号 一九五二年 四月
- 短歌革新の蕪村的傾斜—— 『文学研究』第八号 一九五二年 四月
- 憶良の「めぐし、うつくし」考 『上代文学』創刊号 一九五二年 九月
- 『東西南北』の成立事情—明治中期の歌学論争— 『國學院雜誌』第五三卷三号 一九五二年一月
- 羈旅歌について 『国文学解釈と鑑賞』第一九卷四号 一九五四年 四月
- 短歌革新の蕪村的傾斜—物語性を中心として— 『國學院雜誌』第五五卷一号 一九五四年 五月
- 安倍氏水虎説 『國學院雜誌』第五五卷一号 一九五四年 五月
- 萬葉集の編纂 『萬葉集講座第三卷(研究編)』(創元社) 一九五四年 六月
- 短歌を救うもの 『短歌研究』第一一卷第九号 一九五四年 九月
- 萬葉集の同心異表現 『古典の新研究第二集』 國學院大学編 (明治書院) 一九五四年一月
- 斎つ磐群に草むさず 『上代文学』第五号 一九五五年 五月
- 女身の髪之歌 『短歌研究』第一二卷第六号 一九五五年 七月
- 房総万葉地理考(一)—阿須波の神— 『萬葉集研究』第一号 一九五五年二月
- 天智天皇—蟬丸(十首) 『国文学解釈と鑑賞』第二〇卷一二号 一九五五年十二月
- 万葉集の花鳥風月 『國學院雜誌』第五七卷三号 一九五六年 六月
- 房総万葉地理考(三)—宇麻具多の嶺を中心として— 『和洋女子大学紀要』一号 一九五六年十一月
- 房総万葉地理考—市原台地と十三坊— 『國學院雜誌』第五七卷六号 一九五六年十二月
- 憶良の作品の成立と伝来 『上代文学』第八号 一九五七年 六月

- 房総万葉地理考鹿島郡と海上郡一 『萬葉集研究』第二号 一九五七年 六月
伊能の芝居 『芸能』第一卷九号 一九五九年一〇月
御船祭―相浜神社の引船神事を中心として― 『房総文化』二
号 一九五九年一二月
房総万葉地理考―末の珠名を中心として 『古典の新研究』第三
集 『國學院大学編(明治書院)』 一九五七年 七月 一九五九年一二月
境宮神社考 『和洋女子大学紀要』四号 一九五九年一二月
房総万葉地理考(七)―ママとテコナ― 『和洋女子大学紀要』
二号 一九五七年一二月 一九六〇年 七月
東路 太子道から龍田越へ 『日本古典鑑賞講座第三卷』(角川
書店) 一九五八年 三月 一九六〇年 一月
房総万葉地理考(八)―朝夷郡の古代的様相― 『萬葉集研究』
第三号 一九五八年 五月 一九六一年一〇月
超結社の歌人 『国文学解釈と教材の研究』第三卷九号 一九五八年 八月 一九六一年一〇月
房総万葉地理考―アハビとの関聯において― 『國學院雑誌』
第五九卷一〇・一一号 一九五八年一二月 一九六一年一〇月
境宮神社考―初午祭― 『房総文化』創刊号 一九五八年一二月 一九六一年一〇月
房総万葉地理考―丸子考― 『和洋女子大学紀要』三号 一九五八年一二月 一九六二年 五月
房総万葉地理考―安房の国の歌― 『日本文学論究』第一七冊 一九五九年 三月 一九六二年 九月
房総万葉地理考―名木河 『萬葉集研究』第四号 一九五九年 六月 一九六二年 一月
花爾供養者―大戸の御花祭に寄せて― 『國學院雑誌』第六〇
卷七号 一九五九年 七月 一九六二年一二月
東海万葉地理考 『萬葉集研究』第七号 一九六二年一二月
祭の中の万葉集―コモルを中心として― 『房総文化』五号 一九六二年一二月

神楽と房総の神楽 『まつり通信』 第三三三号 一九六三年 一月
 北原白秋と葛飾 『国文学解釈と教材の研究』 第八卷三号 一九六三年 二月
 松迎え 『まつり通信』 第二六号 一九六三年 四月
 足りない話 『和洋国文研究』 第一号 一九六三年一〇月
 吾妻神社馬だし神事見聞記 『房総文化』 六号 一九六三年一二月
 白間津祭万灯開書大要 『房総文化』 六号 一九六三年一二月
 タカクラ考―馬だし神事に寄せて― 『日本文学論究』 第二三三冊 一九六三年一二月
 神官・僧侶―万葉集に現われた生活の階層 『国文学解釈と教材の研究』 第九卷四号 一九六四年 三月
 酒のあそび 『国文学解釈と鑑賞』 第二九卷四号 一九六四年 三月
 アハビの話 『総南文化』 第三号 一九六四年 三月
 夕暮の系譜 『國學院雑誌』 第六五卷八九号 一九六四年 九月
 郷土誌の位置 『一宮町史』 一宮町史編さん委員会編 (一宮町役場) 一九六四年 三月
 ユリの話―三枝祭― 『上代文学』 第一七号 一九六五年 四月
 飯岡の大念仏考 『房総文化』 七号 一九六五年 五月
 文献学と民俗学と―万葉集を中心として― 『和洋国文研究』 第三号 一九六五年一〇月
 もみちの話 『新国学』 第三号 一九六六年一月

源実朝 『短歌』 第一四卷五号 一九六七年 五月
 祭と万葉集 旗を中心として― 『和洋国文研究』 第五号 一九六七年 六月
 房総の旗 『日本文学論究』 第二六冊 一九六七年 七月
 ことばはいきている―新年のことばと行事 『放送文化』 第二三卷一号 一九六八年 一月
 万葉の春 『萬葉文学』 第一号 一九六八年 一月
 東歌・防人歌 『講座日本文学』 第二(上代編第二) (三省堂) 一九六八年一二月
 実生活諸相 『万葉の世界 文学の世界シリーズ』 (小峰書店) 一九六八年一二月

短歌作品(今井白水)
 鏡(一二首) 『短歌研究』 第五卷第五号 一九四八年 五月
 くちなし(二五首) 『短歌研究』 第五卷第一〇号 一九四八年一〇月
 千葉の海(一二首) 『短歌』 第九卷三号 一九六二年 三月
 春の雨(六首) 『短歌研究』 第二卷第六号 一九六四年 六月
 花(一二首) 『短歌』 第一二卷九号 一九六五年 九月

報告・動向・書評その他
 武田祐吉歌集「魚腹集」 『短歌研究』 第七卷一二号 一九三八年一二月

橋本進吉博士「古代国語の音韻に就いて」『國學院雜誌』第
四八卷八号 一九四二年 八月 阿部正路編「現代代表歌人選集」『國學院雜誌』第六八卷一
号 一九六七年十一月

武田祐吉博士「肇国紀伝」『國學院雜誌』第四八卷二二号

書評 『短歌研究』第五卷四号 一九四二年十二月
一九四三年 四月

万葉学者名鑑(アンケート)——萬葉に何時・如何にして——『上
代文学』創刊号 一九五二年 九月

喫茶室「國學院雜誌」『民間伝承』第一七卷七号

万葉集大成(三) 訓話篇上 『國學院雜誌』第五五卷二号 一九五三年 七月

はがき書評 『出版ニュース』第三〇五号 一九五四年一月
一九五五年 五月

はがき書評 『出版ニュース』第三二五号 一九五五年 八月
尾山篤二郎著「大伴家持の研究」『國學院雜誌』第五七卷五号 一九五六年 九月

喫茶室「提言」『民間伝承』第二〇卷一〇号 一九五六年一〇月
一九五八年 一月

「万葉の伝統」大久保正著 『國學院雜誌』第五九卷一号 一九五八年 一月

境神宮社考——老婆連のおつとめ——(片野清次郎・片野隆司との
共著)『房総文化』四号 一九六一年一月

画期的な大会に寄せて『美夫君志』第七号 一九六四年 六月
書評 山田英世著「セイロン」『和洋国文研究』第五号 一九六七年 六月

(たかはし・みおり／昭和女子大学非常勤講師)